

○ キタカミヒョウタンボク (原 寛・菊地政雄) Hiroshi HARA & Masao

KIKUCHI: A new variety of *Lonicera demissa* Rehder from north Honshu

北上高地からはヤブヒョウタンボク (*Lonicera linderi* folia Maxim.) が知られているが、牧野博士(1906)が同種として引用した八ヶ岳産の標本は後にイボタヒョウタンボク (*L. demissa* Rehder) であることが明かになった。そして後者は本州中部の信濃美ヶ原以南、赤石山脈、八ヶ岳から関東山地西部、富士山などの山地(海拔1000—2000m)に限って産するものと思われてきた。近年イボタヒョウタンボクもまた北上高地に産することが分り、菊地は「陸中早池峯連峯の植物」(1961)の中でこれが遠島山、姫神山、堺の神山、早池峯山、六角牛山、五葉山、室根山とかなり広く分布する事実を記録した。

しかし北上高地のイボタヒョウタンボクは本州中部産の基準形と比べると少し異っている。葉は大形となり枝先では長さ8cm余に達し先端は長鋭先形にとがり、枝下部の葉では基部が円くなり、葉の形と大きさでは反って北海道東部に分布するネムロブシダマを思わせる。花も少し大きく長さ10—16mm、上唇の裂片も長さ2—4mmになる。イボタヒョウタンボクの基準形では勢のよい枝先の葉でも長さ4cm位で先端は鋭頭、花は長さ8—13mm、上唇の分かれ方は浅く裂片は長さ2—3mmである。しかしその他の形質や毛の状態などでは両者はよく一致する。

北上高地のものはイボタヒョウタンボクと同一種と見られるが、上記の差異が著しく離れた分布地域を考へて、その地理的変種と見なすのが妥当と思ひ、ここにキタカミヒョウタンボクの新和名をあたえて発表する。これらはおそらくネムロブシダマと同一祖先からでて本州の山地に隔離孤立して分化したものと考えることができる。

Lonicera demissa Rehder var. **borealis** Hara et M. Kikuchi, var. nov.

A typo foliis majoribus 3—8.5cm longis 1—3.6cm latis interdum apice longe acuminatis basi rotundatis, floribus majoribus, corollis 10—16mm longis, labio superiore 6—10mm longo lobis 2—4mm longis differt.

Typus. Honshu. Prov. Rikuchu: in monte Himekami (M. Kikuchi, Mai. 31, 1961, fl.) in TI.

The discovery of this variety in the Kitakami plateau suggests that *Lonicera demissa* has differentiated in Honshu from the same progenitor as *L. chrysantha* Turcz.